「無冠詞」考

葛　西　清　蔵

0．はじめに

まず次の例をみよう。

1．They (lists) are worth detailed investigation by *student* and *teacher*.

この文の student, teacher がいずれも冠詞もなければ、複数にもなっていないのはなぜであろうか。いわゆる「冠詞の省略」として説明されるのであろうか。そうとすると、いくつかある「省略」の場合のどれにあたるのであろうか。

ここでは、以下で見るように、これは「冠詞の省略」ではなく、もともと冠詞もなにもつかない名詞（いわば「裸の名詞」とでもいうような名詞）の使用法であることを示そうとする。

1．冠詞の「省略」

文法の本で「冠詞」の箇所を見るとまず冠詞の使いかたが説明され、そのあとで「冠詞の省略」の項目と例があげられるのが普通である。たとえば、井上(1993) では、冠詞をあつかう 73 頁のうち 49 頁（67%）が「冠詞の省略」にあてられている。そこには 33 項目にわたって「省略」の例があげられている。その項目のあいだにはまったく脈略がなく、さながら冠詞の省略の用例集である。これでは文法ではない。「省略」は、本来あるべきものを省くことであるが、もともと冠詞のない「無冠詞」とはちがうものであろう。さらに注目しなくてはいけないのは、そこにあげられた例文のほとんどに冠詞のついた例文をそえて

あり、その項目わけが絶対的なものでないことを示していることである。ここでは議論の出発点として、Quirk et al.(1985)の zero article（「無冠詞」）としてあげている箇所をみていこう。そこでは *Uses of zero article* としてつぎのようになっている。

2. Uses of the zero article

(1) the zero article compared with unstressesd *some*

I've just bought a melon/some melons/some *melon*.

(2) the zero article with definite meaning

(3) noun phrases in a copular relation

Maureen is (*the*) *captain* of the team. 'unique role task'

(4) noun phrases with sporadic reference

(a) some 'institutions' of human life and society

go to *town*, *bed*, *hospital*, *prison*, *school*

lie down on *the bed*, walk around *the prison*, visit *the school*

(b) means of transport and communication

travel, come, go by *bicycle*, *bus*, *car*, *train*

take *the bicycle*, be on *the bus*, take *a/the bus*

(c) times of day and night

at *dawn*, when *day* breaks, at/by *night*, *day* by *day*, watch *the dawn*, during *the day*, all through *the night*

(d) seasons

(*The*) *winter* is coming.

The winter of 1963 was an exciting time. 'calendar time'

Winter in 1963 was not like this last winter. 'seasonal climate'

(e) meals

Where are we having *dinner* tonight?

The dinner after his retirement party was quite lavish.

(f) illness

diabetes, *influenza*, *pneumonia*,

(*the*) *flue*, (*the*) *measles*, (*the*) *chicken pox*

(5) parallel structure

arm in *arm*, *face* to *face*, *day* by *day*, *side* by *side*, *eye* to *eye*

from (*the*) *right* to (*the*) *left*, from (*the*) *west* to (*the*) *east*

(6) fixed phrases involving prepositions

hand in *hand*, on *top* of, by *way* of, set *fire* to

これらの項目と例は井上（1993）の「省略」にもみられる。したがって、井上（1993）の「冠詞の省略」は、Quirk et al. (1985) の zero article（「無冠詞」）とおなじ事象をあつかっていることになる。ところが、ここでは個別的な例があげられているだけで、「冠詞がない」という共通の現象についての説明がない。以下では、「冠詞がない」という共通の現象についての説明の糸口をさぐりたい。

2．「無冠詞」の例とその性質

(1)の例の student and teacher に関連すると思われる事項について、Quirk et al. (1985)、井上(1993)を参考にしながら、それぞれの例について順次みていく。まず Quirk et al. (1985)の(3) 'noun phrases in a copular relation' の場合としてあげてある例は、一般に「官職をあらわし、一人しかいない場合、冠詞を省略する」とされているのものであるが、(the) captain とあるように、ここでは、冠詞の有無は絶対的なものではない。

井上（1993）でみると、「官職・身分」を表す場合をあげ、

3．a　He became *king*.

　　b　He is *professsor*.

　　c　*a teacher* of English at K.

(3a) (3b) のような例をあげているが、(3c) では「補語以外の場でつかわれるときには冠詞をつける」(正保 1996) といわれるように、補語であることと冠詞の有無がどんな関係にあるのかも問題になってくる。さらに、井上 (1993) であげられている項目で関係すると思われるのは、

4. He played so many parts, *sculptor*, and *poet*, *traveller*, *lover*, *politician*, *diplomat*, and *man of fashion*.

の sculptor, poet などについて「単に項目として用いた名詞」の場合としている。これは、(3)の「官職・身分」とどのような関係にあるのであろうか。また、井上 (1993) には「as (～として、～の資格で)」という項目があり、

5. a He wants position as *teacher* of English.
   b As *a teacher* he has no equal.

(5a) のような例があげられているが、これには (5b) という例が付記されており、やはり(3)(4)でみたような例との関係がはっきりしない。

さらに、井上 (1993) には、「名詞 as/though」という項目があり、

6. a *Child* as/though he is,……
   b *Hero* as (though) he was, he wept at the news.
   c *Utter fool* that I was!

(6a) の例がある。金口 (1976) にも「普通名詞は冠詞をとらない」として (6b) があげられている。(6c) は皆川 (1959) の例である。(6a) (6b) は、

7. *Young* as he was, he was not unequal to the task.

と同様の構文であり、(6)は(7)との関係で説明されるべきものであろうが、(7)の文は、

8．as (*or* so) young as I am

という「形こそ今日の young as I am の祖先なのである」（市河 1954）とすれば、(6a) の child、(6b) の hero に冠詞がないのも補語であることが関係している可能性がある。

以上、簡単に(1)の student and teacher の冠詞にかかわると思われる項目と例をみてきた。しかし、これらの例は、それぞれ共通の原理で説明されそうな例でありながら、たがいに関連のない項目に入れられており、「冠詞がない」ということにたいする共通の説明がまったく与えられていない。さらに関わりがあると思われる項目についてみていこう。

9．a　Where are we having *dinner* tonight?
　　b　*The dinner* after his retirement party was quite lavish.

これらは Quirk et al. (1985)の 'meals' の例としてあげたものであるが、よく話題になる例で、井上（1993）でも、「病気・食事」の項目につぎの例がある。

10．a　after *lunch*
　　b　We had *a* fine *lunch.*

(9a,b)（10a,b）の例から推測できることは、「特定」の食事のときには、冠詞がつき、「朝食でもなく、夕食でもなく、「昼食」という食事」というように「昼食一般」について言うときには冠詞がつかない、ということで、たとえば皆川（1959）はこれについて「一般的な意味に使われるときには無冠詞」という。このことは、

11. *Language* is the peculiar possession of man.

(11)の language についてもいえる。ここでは language は特定の言語をさしているわけではなく、language というものは 'a system of signs or system used for conveying information' (*COD*)という、まさしく「言語一般」についていっている。英語、独語など特定の言語の場合は a language, the language となるはずのものである。

ここまでくると、'type'と'token'という用語が思い起される。たとえば、ある頁に the なら the という語が 25 回でてくるとしたら、その場合、the という type の token が 25 ある、という言い方をする。これになぞっていえば、つぎのような表現ができるかも知れない。

12. a language (English)
a language (French)
a language (German)
a language (Japanese)
.....
a language (Chinese)

} language

tokens　　type
(個別的・具体的)　(一般的・抽象的・概念的)

このことをふまえて、「冠詞のないこと」について、

12. type としての使い方のときには冠詞がつかず、token の場合はつく、

と考えることができる。以下では、(12)を土台に検討する。まず、Quirk et al.(1985)の(3)(a)'institutions', 井上 (1993) の「内容を示す場合の建造物 (本来の目的・抽象的)」という項目に(13)がある。

13. a at *school*, go to *church*
    b go to *a school* where white pupils studied.

これらは「本来の目的の意味で使われる」場合（13a）と、「建物そのもの」(13b) として説明されているものである。これは確かにある程度当てはまるように見える。しかし、Quirk et al.(1985)では、この箇所に go to sea がある。sea の本来の目的は「船員になる場所」ではない。ここでも、やはり個別的な token の場合は冠詞がつき、一般的な type のときには冠詞はつかないといえよう。つまり church は、

14. a a building where Christians go to whorship (Longman)
    b a building for public Christian worship (*Oxford student's Dic.*)
    c a building for public, esp.Christian, worship (Penguin)
    d a building in which Christians worship (COBUILD)

(14)のような「キリスト教徒が礼拝する建物」という、もっとも一般的な意味で使われるときには冠詞がないようである。〈キリスト教徒〉〈礼拝〉〈建物〉は、church という語が適切につかわれるために必要な条件の集合、つまり、church の「概念的意味」である。すなわち、ある語が「概念的意味」でつかわれるときには冠詞がつかない、といってもいいかも知れない。もちろん個別的な場合には (13b) の例のように冠詞がいる。さらにべつの項目と比較しながら検討する。Quirk et al.(1985)には、'means of transport and communication' という項目がある。これは井上（1993）では「慣用句」の一部としてあげられている例が含まれる。

15. a by *train*, by *letter*
    b on *the train*, on *the radio*

ここでも「汽車というもので」という「一般的」な意味では冠詞がなく、「個別的」なときには冠詞がついている。井上(1993)では、この箇所に by *heart*, have in *mind* があげられているが、これらは 'means of transport and communication' とどんな関係があるのであろうか。移送・伝達の手段とか、「慣用句」などということばではくくりきれない。井上 (1993) はこの「慣用句」のところに、「列挙」としてつぎの例をあげてある。このことに注目しておこう。

16. a without *knife* and *pistol*
    b *night* and *day*, *mother* and *child*

ここでは、二つのものが and でつながれており、(16a) (16b) ともに「個別的」であるよりは「一般的」な意味で使われている。つまりどのナイフ、ピストルというのではなく、「ピストルというもの」、「ナイフというもの」などの意味である。night, day, mother, child は、やはり特定の night, day, mother, child ではなく、むしろ、その性質が相対するものとして並列させてあると思われる。Quirk et al.(1985)は、'times of day and night' の例として、

17. a when *day* breaks
    b during *the day*
18. a at/by *night*
    b wake up in *the night*

(17a) (18a) をあげているが、これらには、(17b) (18b) という冠詞のある例が付記されている。(17a) の day は 'the time during which the sun is above the horizon' (*COD*) の意であり、(18a) の night は 'the dark hours between sunset and sunrise' (*COD*) の意である。これらの例についても、冠詞のないほうは、「(ほかの時間ではなく) ～という時間」というもっとも一般的な意味で使われていることが、共通にみられるようである。井上 (1993) には「季節・

週・月」という項目があり、次の例がある。

19. a If *Winter* comes, can *Spring* be far behind?
    b *The winter* was gloomy.

(19a) の winter, spring は、まさしく「ほかの季節ではなく、冬という季節」、「ほかの季節ではなく、春という季節」というような「冬一般」、「春一般」についていっている。特定の冬であれば、(19b) のようになる。以下では、このことを検証しながら、他の例をみることにする。

また、井上 (1993) は「遊戯の名」という項目をもうけ、⑳の例をあげる。

20. play *tennis*, *basketball*

ここでも「(ほかのスポーツではなく) tennis というスポーツ」と理解される。⑳と対照してあげられるのが、つぎの場合である。

21. a play *the piano*
    b She used to play *piano* in a jazz band.

松本・松本 (1996) は、(21a) について「弾くのはたいてい自分のもっているピアノですから」特定的で the がつき、(21b) については、「ピアノという楽器ではなく、ピアノというパート」という意味では無冠詞だという。COBUILD (1992) には、

22. a You play *the guitar*, I see.
    b …… the night spot where John played *guitar*.

の例がある。また、Swan (1995) は、「jazz や pop について話すとき」には冠

詞をおとすことが 'often' であり、「クラシック音楽について話すとき」には 'sometimes' おとされる、というが、これでは説明にならない。

(21a) (22a) では、たしかに「特定のピアノ」、「特定のギター」といえようが、(21b) (22b) では、「(ほかの楽器ではないくて) ピアノという (種類の) 楽器」、「(ほかの楽器ではなくて) ギターという (種類の) 楽器」という意味に解するほうがよさそうである。

最後に、井上 (1993) が「警句的な語法」の項目のもとにあげている(23)をみよう。

23. a Though *body* be strong, *mind* is stronger.
    b Like *master*, like *servant*.

ここでも、やはり body, mind, master, servant は特定のものについてのべているのではなく、mind, servant に対照されるものとしての body, master 一般について用いられていると考えられる。この対照すべきものとしての無冠詞の用法は (16b) でみた night and day のような並列された例との関連性に注意しておこう。

以上、冠詞もなにもつかない、いわば「無冠詞」の名詞について一通り概観してきた。

24. 冠詞のあるものはいずれも「特定的」、「個別的」なものであるが、「無冠詞」の場合は、きわめて「一般的」でタイプ・種類に注目して「(〜ではなくて) 〜という (性質・種類の) もの」というような意味で使われている、

と考えられる。church が「無冠詞」で使われるのは「キリスト教徒が礼拝する建物」という意味のときであり、これはまさしく個々の church についていっているのではなく、church「一般」についてあてはまる church の定義そのものの意味での使いかたである。

3．㉔の検証

ここでは、㉔でみたように、その名詞が「(～ではなくて）～という（性質・種類の）もの」という意味で使われるときには無冠詞となることを検証したい。

個別的に使われるときには、冠詞がつくか、複数形になるはずのものが、そのいずれをもとらずに使われる例はつぎのような場合にもみられる。

25. a　I was *fool* enough to believe him.
　　b　They turned *traitor*.
　　c　The oldest daughter turned *nurse*.

fool, traitor, nurse はいずれも補語になっている。しかも enough がつくなど「形容詞的」である。皆川（1959）は（25c）について、「nurse のする仕事を引き受けたのであるから無冠詞である」とあるのは、いまひとつはっきりしい。ここでも、fool, traitor, nurse は「（ほかのものではなく）fool, traitor, nurse という（性質・種類の）もの」という味で使われているとみることができる。

26. a　We usually have *breakfast* at about seven o'clock.
　　b　We've had a lovely evening, and *the dinner* was delicious.

食事に冠詞がつかないというのは、すでにみた（9 a）（10a）や（26a）のような場合であって、個別的、具体的な場合は、冠詞がいる。ここでも「(昼食、夕食ではなく）朝食という（種類の）食事」の意味では冠詞がない。興味深いのは、㉖の例について、Turton（1995）は「食事のタイプのときは不可算名詞である」し、「特定の食事のときは可算的」とのべていることである。タイプとして、他のものとの違いが問題になるときには不可算数となるという言い方は注目したい。

27. a This engine doesn't use *petrol*.
    b Is there *water* on the moon?

このpetrolについてSwan (1995) は'the interest is in the type, not the amount'とのべている。ここでもtypeということばが使われているが、ここでのpetrolは「(ほかの油ではなくて) petrolという (性質・種類の) 油」、「(ほかのものではなくて) 水という (性質・種類の) もの」ということであろう。

28. They went to Africa to hunt *lion*.

安井 (1996) は、このlionについて「狩猟や農業にかかわる状況で、対象物の集合が量的にとらえられている場合」としているが、しかし、これは正確ではない。このlionもやはり「(ほかの動物ではなくて) lionという (種類の) 動物」というように、他の動物との違いが問題になっているからであろう。このことは、以下にみるように類例で確かめることができる。

29. a Have you ever shot *duck*?
    b Can you see *the ducks* on the pond?

Quirk et al. (1985) は (29a) のduckをzero plural (「ゼロ複数」) とし、これは「動物にとくに関っている人たち」によって、「獲物として言及されるときに使われるという。また、安藤 (1996) は、おなじ (29a) のduckについて、Webster[3]の解説として、これは「ゼロ複数」であり、「狩猟者をする人々が好んで用いる傾向がある」という。そして、さらに、Sweet (1898) の「狩猟者は、これらを〈個性〉をもった動物としてではなく、獲物 (game) として〈量的〉にとらえている」のだという。これは、(28)でみた安井 (1996) の「集合が量的にとらえられている」という言い方と平行するものである。しかし、これも説明が正確ではないと思われる。(27)のlionの場合とまったく同じように、ここで

問題になっているのは「(ほかの鳥ではなくて) duck という (種類の) 鳥」の意味のはずである。その証拠には「狩猟者がよく使う」ということは、狩猟者にとって、数もさることながら、どんな種類・タイプの鳥を捕ったかが関心に中心であるはずだからである。ちょうどハンターにとってどんな動物を捕ったかが関心の中心であるように。(さらにいえば、「病気」には冠詞がつかない場合はすでにみたが、それも、人にとって「どんな種類の病気」にかかったのか、にまず第一の関心があるからだ、ということもできる。)これには証拠としてさらにつぎのような例をあげることができる。

30. …… the night spot where John played *guitar*. (=(22b))

さきにあげたこの例について、COBUILD (1992) では、'However, rock and jazz musicians omit the *the*' といっていることである。音楽家にとっては、ちょうど上で見た狩猟者にとっての獲物のタイプが問題であるのとおなじく、どの楽器を弾くかが関心の中心になるはずである。さらに COBUILD (1992) には、(31)の例があり、まったく同じ説明が与えられている。

31. a …… *the* Irish *writer* and *critic* Maeve Binchy.
    b …… *writer* and *critic* William Gass

(31a) では冠詞がある (critic に冠詞がないのは、単純にくりかえしをさけるための、省略のはずである) が、これに対して (30b) のような冠詞のない例について 'Journalists and broadcasters sometimes omit the *the*' とのべている。これで、上にみた、duck, lion に対する「量的」にみたために冠詞もなにもない、という説明が適切でないことが明らかである。そもそも guitar, writer, critic が「量的」にみられる、とはありうることであろうか。それとも、guitar, writer, critic の例は、duck, lion とはべつの方法で説明するのであろうか。

以上のような例で共通にみられることは、狩猟であれ、音楽であれある対象

にふかく関っている人たちにとって、個別化された、特定の duck, lion, guitar などよりも、duck, lion, guitar と区別された「(ほかの動物でなくて)duck, lion という（性質・種類の）動物」というように、タイプが関心の中心になるときには、まさしくその語の意味、概念的な意味で使われ、いわば「裸の名詞」が使われると思われる。これは、個別化された、個々のものをさす場合とはまったく違ったレベルの使われ方である。タイプとして使われ方を仮に「reference（指示）のレベルでの使われ方」とすれば、個別的なものをさすときの使われ方は「referent（指示物）のレベルでの使われ方」ということができよう。

以下では、過去の研究のなかから、このような考え方に言及がないかみてみることにする。

さきにみた Swan (1995) の無冠詞は「amount「量」よりも type に関心がある場合」に用いられる、という箇所にはこのことがもっとも端的にのべられている。Swan は、さらに 'we usually use no article, not *the*, to talk about things in general' (59) というように、'things in general'（「一般的なもの」）を指すときに無冠詞となるというが、この箇所は、「個別的なものではない場合」には無冠詞となると読むことができる。

また、Quirk et al.(1985)には、'the zero article indicates simply the category of the objects etc. referred to' (275) とあるが、この 'category' とはまさしく 'a type, or a group of things having some features that are the same' (*Cambridge International Dic. of Eng.*) にみるようにタイプのことである。

つぎに、ビアール (1957) をみよう。まず、I drink nothing but *water*, never drink *wine*.の例をあげ、「思考がただ事物の性質という観念のみを対象とし、全然その量やその数の観念を対象とせぬ場合」(下線筆者)に無冠詞となるという。さらに at school, at hand などについて「事物の概念」の場合にも無冠詞となる、と「概念」として使われるときにも無冠詞となるとする。

そのほか、クリストファーセン (1985) は、I like tea.について「問題となるのは質であって、量ではない」(19)といい、さらに「概念」について「概念はただ意味をもっているだけであり、ただ性質だけである」という趣旨のことをの

べている。

以上みてきたように、「無冠詞」の数多くの例そのものについて、共通にあてはまる「定義」らしいものは、どこにもみられないが、個別的な例に対する説明のなかには、きわめて重要な言及がいくつかみられる。これらは、いずれも、

32. 名詞が「(ほかのものではなくて) ～という性質・種類のもの」というタイプ・種類に注目した使われ方のときにはなにもつかない名詞（「裸の名詞」）が使われる、

ということを示しているということができよう。

4.「対比」と「無冠詞」

以下では、上でみてきたことをふまえ、(1)としてあげた例をみよう。

33. They (lists) are worth detailed investigation by *student* and *teacher*.
(=(1))

この student, teacher が冠詞をもたず複数にもなっていない理由を考えてみることにする。

すでに、述べてきたところから、student, teacher に冠詞もなにもない理由は、この student, teacher が、個々の student, teacher を問題にしているのではなく、「ほかのものではなく、student, teacher という性質・種類の人」という意味で使われているため、と考えられる。これで、この脈略では十分に説明になっていると思われるが、最後に、以前に注意を促しておいたことについて、簡単にふれておきたい。

それは、井上 (1993) が「慣用句」としてあげた一連の例のうち、「列挙」としてあげた without *knife* and *pistol* などの例についてである。Quirk et al.

(1985)にあった 'parallel structure' には、*arm* in *arm*, *face* to *face*, *day* by *day*, from *father* to *son* などの例をあげ、これらを 'frozen' なものとしている。'frozen' とは、おおむね「固定化して」おり、手を加えることを拒否するものであるから、これはこれとして扱うしかないということであろうが、やはり、「冠詞がない」という共通の性質をもつかぎり、おなじく「無冠詞」の説明の対象とすべきである。

さて、ここにあげられた例は、いずれも、二つの名詞がでてくる。

34. a at *night*, by *night*
    b in *the night*
    c from *morning* till *night*

たとえば、(34)の例において、(34a) は、「(昼ではなくて) 夜に」という意味であろうし、(34b) では、「(ある特定の) 夜に」という意味であろう。それでは (34c) はどうなるのであろうか。このような例こそ、「裸の名詞」の使われ方をもっともよく表している。「(ほかの時間ではなくて) 朝 (という時間)」と「(ほかの時間ではなくて) 夜 (という時間)」というよう対比され、まさしくタイプが問題になっている表現である。ここでは、「何日の朝」とか「何日の夜」とかというように、個別的な朝、夜は全く問題のそとにある。Swan(1995)が、'double expressions' では、冠詞が落ちるとしてあげる

35. on *land* and *sea*, *husband* and *wife*, from *top* to *bottom*

などの例は、いずれも上でみた理由によるといえる。Eastwood (1994) は、'contrast' は冠詞のつかない場合であるとして、(36)の例をあげている。

36. a I lie awake *night* after *night*.
    b The whole thing has been a fiasco from *start* to *finish*.

また、小稲（1958）には「対句・列挙などにおける無冠詞」という項目があり、つぎのような例がある。

37. from *hand* to *mouth*, from *father* to *son*, from *beginning* to *end*

井上(1993)の「列挙」、Quirk et al.(1985)の 'parallel structure'、Swan(1995)の 'double expressions'、小稲 (1958) 岩井 (1956) の「対句」、Eastwood (1994) の 'contrast' の場合には「無冠詞」になるというのは、すでにみたような理由にによるからにほかならない。そもそも、

38.「(ほかのものではなく) ～という性質・種類のもの」という意味での名詞の使い方は、「(ほかのものではなくて)」とあるように、当のものと、それ以外のものとの性質・種類のちがいをつよく意識した使い方であり、どうしても対比・対照の文脈にでてきやすい、

のである。さきにあげたビアール（1958）は、冠詞の省略の例に「列挙」の場合をあげ、「対立または対照の観念を引き立たしめる」といっているのは、きわめて適切な指摘である。すでに見た、

39. a If *Winter* comes, can *Spring* be far behind? (=(19a))
    b Like *father*, like *son*.

なども、まさしく個別的なものではなく、性質・種類・タイプこそ問題になっている。そのときには、可算・不可算の世界とはちがう観点での、名詞の使い方であり、このときには、いわば可算・不可算の範疇とはちがう「裸の名詞」が使われるのであって、決して「冠詞が省略」されたのではない。もともと「冠詞がつかない使い方」なのである。「本来冠詞を用いるべきところに冠詞を用いないというのではなく、冠詞のない形が本来なのであるから、理論的には無冠

詞と称するほうが正しい」(江川 1959) ということになる。

5. まとめ

冠詞の「省略」や、「無冠詞」は共通に「冠詞のない事例」についての説明の方法である。「省略」には「本来あるべきものが省かれた」という意味合いがあり、「無冠詞」というのも「冠詞がある場合」と対比された表現である。しかし、すでに見た通り、冠詞のない例にはほとんど常に冠詞のついた例が付記されていた。これは従来の冠詞のない場合の項目わけがいかに正当性がないものであるか、を示してもいる。であれば、むしろ「名詞には冠詞のつかない使い方」がもともとあり、「冠詞がつくのはどういう場合か」と発想を逆にしたほうがよいのではないか。これまでの「冠詞の省略」、「無冠詞」の説明の不適切さの原因はまずここにある。

さらにいえば、「冠詞の省略」、「無冠詞」は「数」の問題とふかく関わっているのに、これが考慮されてこなかったことも冠詞の問題を見えにくくしてきた原因のひとつであろう。Bradley & Potter (1970) は、合成語 apple-tree の apple について、「単数でもなければ複数でもなく、主格でも対格でもない」という。この apple こそ「裸の名詞」そのものである。(a five-act tragedy の act も同様である。) They turned traitor.の traitor の形は「冠詞」、「数」の問題にふれないでは説明しようがない。「ゼロ複数」というのも冠詞がつけるかどうか、という問題をぬきにしては十分な説明ができないであろう。

名詞には「概念的意味」そのもので使われ、そのときには冠詞も「数」も関わらない使い方で、そのときにはいわば「裸の名詞」(bare noun とでもいうような形) を使う。これが見かけは「冠詞の省略」にみえたり、「無冠詞」にみえたり、「ゼロ複数」にみえたりするのであろう。このような名詞の使い方は概念的、抽象的であるので、「定的」なものがきやすい主語の位置よりは、述語となる補語の位置にきやすい、ということになる。清水 (1971) が、冠詞がない場合は、名詞が「抽象名詞化」され、「個体よりもその性質や機能に重点がおかれ」

補語として使われる、というのはこのためであろう。

最後に、このタイプ・種類に注目した「裸の名詞」の使い方は、日本語の「机の上に本がある」という時の「本」という名詞の使い方にきわめて近いことに注目したい。この文の「本」は「あれ・これの本」という「定性」についても、一さつ、二さつという「数」についても全く不明で、ただ「（ほかのものではなく）本という（種類の）もの」ということしか示していないからである。

参考文献

安藤貞雄．1996．『英語学の視点』開拓社

荒木一雄・安井稔（編）．1992．『現代英文法辞典』三省堂

Biard, A. 1908. *L'Article défini dans les principales langues européennes* 1. L'Article l "the" et les caracterestique *différentelles de son emploi* 厨川文夫訳 1957 『定冠詞論』 研究社

Bradley, H. & Potter, S. 1970. *The Making of English* 大塚高信注 成美堂

Christophersen, P. 1939. The Articles: A Study of Their Theory and Use in English 一色マサ子訳述 1958『冠詞』 研究社

Colins COBUILD English Usage. 1992. Harper Colins Publishers

Colins COBUILD English Guides 3: *Articles*. 1993. Harper Colins PublishersEastwood. 1994. Oxford Guide to English Grammar Oxford

江川泰一郎．1961．『冠詞・形容詞・副詞の用法』研究社

市河三喜．1954．『英文法研究』研究社

Jespersen, O. 1949. *A Modern English Grammar* Vol. VII Copenhagen

井上義昌（編）．1993．『詳解 英文法辞典』開拓社

岩井慶光．1956．『冠詞の研究』篠崎書林

金口儀郎．1976．『英語冠詞活用辞典』大修館

熊山晶久．1993．『英語冠詞用法辞典』大修館

小稲義男．1958．『冠詞・形容詞・副詞』研究社

斉藤武生・鈴木英一．1984．『冠詞・形容詞・副詞』研究社出版

松本安弘・松本アイリン．1996．『英語の名教授』丸善株式会社

皆川三郎．1959．『冠詞・名詞・代名詞』泰文堂

大塚高信ほか（編）．1955．『英文法シリーズ』研究社

大塚高信・中島文雄（監修）．1982．『新英語学辞典』研究社

Quirk, R. Greenbaum, S. Leech, G. Svartvik, J. 1985. *A Contmporary Grammar of the English Language* Longman

清水護（編）．1971．『英文法辞典』培風館

正保富三．1996．『英語の冠詞がわかる本』研究社

Swan, M.[2] 1995. *Practical English Usage* Oxford

Sweet, H. 1898. *A New English Grammar* 2vols. Oxford

Turton, N. D. 1995. *ABC of Common Grammatical Errors* Macmillan Languagehouse

安井稔（編）．1996．『コンサイス英文法辞典』三省堂